# 文化伝承も安全重視

## 幼保施設の節分行事

## 国内の窒息事故 教訓に

### アレルギーにも配慮

「節分」の3日、全国各地の寺社や家庭などでは豆まきを楽しむ光景が広がった。子どもたちが通う幼保施設でも恒例行事となっているが、食品にまつわる事故を回避する観点から「豆まき」を自粛する所もある。

節分を控えた1月下旬、内閣府などは都道府県に対し、食品等の誤嚥による子どもの窒息事故に注意を促す文書を送付。市町村担当者や施設・事業者に周知徹底するよう求めた。

消費者庁によると、14(平成26)年からの6年間で食品誤嚥により窒息死した14歳以下の子どもは80人。うち、9割に当たる73人が5歳以下の未就学児で占められていた。

かみ砕きや飲み込みの力が不十分な子どもが、豆類を食べた際、のどや器官に詰まらせて窒息したり、肺炎を起こしたりするリスクがある。特に、口の中に豆類が入ったまま走り回ったり、寝転がったりして食べると、咽頭に豆類が入りやすく、窒息や誤嚥の原因になるという。

水沢日高小路の幼保連携型認定こども園日高ななつ星(千葉正睦園長)でも、全国の誤嚥事故の事例や関係者からの指摘もあり、豆を使った節分行事は実施していない。、食品アレルギーへの対応も理由という。

同園では、丸めた新聞紙などを豆に見立て節分行事を楽しんだ。千葉園長は「新しい時代の考え方に沿いながら、今後も工夫していきたい」と話している。

丸めた新聞紙で節分行事を楽しむ日高ななつ星の年長児たち